

せながむい

編集・古平町史編纂委員会
発行・古平町史編纂室
第二十三号（一日発行）
平成三年八月一日

再び明治初期の古平の人口

近 藤 せつ 一

明治四年から三年後の明治七年までに、古平に入った人たちの職業は一段と多様になっていく。雑業・漁奉公・医業・商人・大工職・桶屋職・髪結職・漁業・住職・娼妓渡世・商奉公・料理渡世・農業・その他で、出身はほとんどが東北地方（陸奥）からの出稼ぎである。この人たちは、必ず引き請（受）け人がいて、身元保証人ともなっていたようである。

開拓使出張所が「戸籍調」として、古平の人口を調査したのは明治四年（一八七二）が最初である。下記の表は、その調査結果をまとめたものである。
（※地区別は当時の呼称）

明治四年四月に戸籍法が発布され、古平では六月に戸籍調をしている。
この表によると、一時出稼人は漁期が終わると帰って行った

古平郡 一戸 戸籍調 明治四年六月（古平郡諸調）

地区名	家数	男人数	女人数	合計
字美々たれ（みなと町）	三二	八七	六七	一五四
字浜町	七二	一三九	一一〇	二四九
字ラルマキ（沖町）	一五	四四	四二	八六
弁財泊	六六	一一二	一一七	二二九
字オタスツ（歌葉）	一五	三五	二四	五九
字ヘロカルウス（群来）	一〇	二三	一五	三七
メナシ泊	一八	四八	三八	八六
出稼家数	五三	四八六	六四	五三五
一時出稼人	一	一	一	二〇五八
土人（アイヌ）	三七	六二	五二	一一四

ので、実際に古平の人口は、土人（アイヌ）をふくめて一五五六人となる。その後、どのように古平の人口が増加していったのか興味があるが、しかし、その後の調査はどうも不正確なようである。
以後最も正確な数字は、わが国の第一回国勢調査（大正九年十月一日より五日間）の数字である。

世帯数 一四六五戸
人口 七八七七人
（男三九四五・女三九三二）
—— 終わり ——

大阪からはるばる古平を

訪ねて来た『古平』さん

「こひら」と言いますが、
といって名刺を出された。その名刺には、「古平好行」とあった。「北海道に来ていて、古平町のことを新聞で見た。自分の苗字と同じなので何か関係があるのではないかと思って訪ねて来た。」というのである。

だいたい日本人の苗字の八五％は、地名からとったと言われているが、アイヌ語を語源にした古平と同じ苗字というのは少ないのではなからうか。

古平にも住んでいた

二軒の『古平』さん

古平にも『古平』という苗字の人が、新地町一番地に住んでいて、戸主は古平清吉さん。

ところが、同じ新地町十七番地・伊藤忠吉さんの四男は、名前が『古平』さん。どちらも戸籍にはちゃんと載っている。

五十八年前の修学旅行

そして、その翌日

翌日、函館ドックの見学をしたが、とにかく見たことも聞いたこともないそのどでかさに驚いた。ドックの底をおそろおそろのぞいて見ると、下で働いている人が小さくみえる。まるで山の上から、谷底を見るようなものだった。

特別な感懐も無く、ただ、城の石垣を見たことだけである。とにかく、食うことばかりに目がいってしまう。

湯の川で一泊したのかも知らないが、片田舎のさびしい風景だけが印象に残っている。それでも、裸になって、屋外にあった湯ばなの浮いたぬるぬるしたプールで泳いだことだけは、忘れないで覚えている。

温泉だから、風呂のように熱



函館消防署では、「相馬号」とかいう赤い消防車を見せてくれた。手押しポンプの時代だったから、多分、北海道には何台も無かった近代的な消防車だったにちがいない。今ののように、バスに乗って見学するのと違って、ゾロゾロと列になって歩くので大変だった。

最後は、五稜郭と湯の川温泉だったと思うが、五稜郭はあま

いと思っていたら、なんとなく温いドブ川で泳いだような気分だった。

一生懸命思い出しながら書いてはみたものの、なにせ半世紀以上も前のことなので、多くは忘れてしまった。

ただ、クラスの何人かは、経済的な事情などから行けなかった。いま思うと、私の場合は、母や兄に感謝しなければならな

い。また、よそ様から小遣いなど戴いたのだろうか、お礼も言わないでいいのかも知れない。お土産を買って来たというようない記憶もなし、改めてお礼を申し上げたい。もう、あの世へ行かれた方もあるだろうに……。

まったく申し訳ないことである、と思っている。

—— つづく ——

「昭和八年七月二十一日に出生して、二十四日に帰着している。男女百四人（百余人？）が修学旅行に参加した、という記録が残っている。」

《東京ふるびら会》の様子をご紹介します。

「高野素十さんの句に、『ふるさとを同うしたる秋天下』とありますが、ふるさとを遠く離れ東京の地に集まり、遥かなふるさと古平に熱き想いを馳せ、酒を汲みかわし、過ぎにし思い出を語り合っている私たちは、この句に何か心の通うものを感じることがあります。」

東京ふるびら会

それは、私たちにとってかけがえない、ふるさと古平があるからではないでしょうか。ふるさとを離れたものにしかわからないこの心情を、いつまでも心の中に大事に温めておきたいものです。

宴会場での恒例の古平正調越後盆踊りは、今年は最高の盛り上がりでした。若手の盆踊りの名手が現れて皆をリードしたのと、ふるさと古平の正調越後盆踊保存会会長堀昭夫様より贈られた盆踊り用の手拭が、一層そのムードを盛り上げてくれました。会長の堀昭夫様ありがとうございました。（以下略）

- 会長 湯田 知一
 副会長 石井 正
 幹事 藤沢 謙三
 同 篠原 侑子
 同 青木 美恵
 同 飛沢 誠司
 同 藤田 保三
 同 橋 義春
- ❖ ❖ ❖ ❖ ❖
- （会員は、六月一日現在で四十七名です）

随筆

古平 四

青春群像

古川 善我 雄



「どう思う？」と、私に助言をもとめた仲間は多かつた。

敗戦直後の日本は、お先真っ暗であつたが、若い彼らには希望が輝いていた。ほんの少し先輩の私は戦後早々に妻帯していたが、仲間たちは、青春真っ只中の結婚適齢期。次々に「話」が襲ってきていた。

斎藤嘉勝君の彼女は、『ミス古平』と、若者たちを騒がせていた気立てよし。文句のあるうはずも無い。

山口春江さんは、唐突に関川孝君からプロポーズされ、自分では七割方傾斜しているの相談だったから、こっちも気が楽であつた。

斎藤清一君は、簡単に納得する相手では無い。彼自信が懸命

に自分に言い聞かせたり、それに反撥したり悩みを開陳しては、大いに私も悩まされた。

後藤つたさんは、単純で複雑だった。ある地方都市の教員が彼女を懇望し、あまりに知らない彼とのロマンス不足が、多感な彼女の決断を拒んでいた。チヨイ先輩の私は、あまり迷

『トリカブト殺人事件』などと、物騒なことが新聞紙上を賑わしているが、アイヌの人たち

毒矢に使われた《トリカブト》 売買禁止の触書 上

は、鎌（やじり）に付ける毒としてこのトリカブト（附子ブシ）を使った。古平周辺のブシ

いもせず、ことごとくGOサインを出した。それぞれ個性の違いはあつても、私から見れば彼女や彼たちは、超一級の人間性豊かな友人たちであつたからだ。どんな相手でも、同化順応し、そして吸収できる能力や巾は充分持つていた。

こんな人たちを、友と呼べる幸せはたまらない。一人だけ、悲しみの底から想い出す友が居る。三川正君だ。役場内で相思の彼女と、結婚を近くして啗血した。肺葉切除の手術後、余りにも若い人生を札幌の北辰病院で終えた。急報で小樽から駆けつけた彼

は毒性が強く、採取して売られていたらしく、文政十二年（一八二九）次のような売買禁止の触書（ふれがき）が出ている。要約して書き改めると、「近ごろブシを他国へ売る者

女が、暗い地下の安置室にひっそりと佇んだ。彼女の肩が次第に波打って、悲痛の慟哭となつた。その晩、私と斎藤嘉勝君は彼の遺髪を封筒に入れて、ススキノに跳び出した。生前の正を加え、三人で飲んだことのある店をハシゴした。二人とも痛飲した。

グシヨグシヨ泣きながら、卓上に飾った封筒に「正、飲め」と、グラスを捧げる私たちをホステスたちは怪訝な顔で眺めていた。その夜から、北一条の街灯をかすめて、冬の初めの粉雪が音も無く降り出した。（終わり）

がいと聞いていたが、甚だ不らちなことである。これは役所で扱っている品なので、以後、これ売ったりすると、厳しいおとがめを受けることになるので、このことをもれなく知らせること。 丑二月七日

町役所

請負人

（写しがあるが出典不明）

【△7日はこんな日】 積丹半島各地に強震

震源地は神威岬沖北西

〔昭和15年〕

『二日前零時八分ごろ、本道日本海岸寄一帯に相当激しい地震が襲来、道民の真夏の夜の夢を破った——以下略（北海タイムス・八月二日付朝刊）』

蒸し暑い夏の夜——ちようど眠りについたころ、突然、大きく家を揺るがす地震に、町内の人々は皆はね起きて戸外に飛び出した。続いて何回かの余震があり、棚の器物が落ちて壊れるなどしたが、家屋の直接の被害は案外少なかった。

地震の恐怖から、多くの人はそのまま外で過ごし、まんじりともしない夏の前夜明けを迎えた。

震源地は、神威岬沖北西約三百キロの海底で、岩盤の崩れによるものであった。

近ごろにない大きな地震で、津波が心配されたが、築港で水位が二センチほど高くなり、朝方に

なつてようやく平常に戻った。海へ流された磯舟もあつたが、そのほか漁船などへの被害は無かつた。

夏イカの季節でもあり、沖で漁をしていた多くの人たちは、海水が盛り上がってきたのを見て、「地震ではないか」と思ったそうである。

この地震で、防波堤に亀裂が生じ、また、ローソク岩が欠け

積丹半島へ鉄道敷設を

実地踏査と既設線の相視察

(一)

鉄道敷設基礎調査委員は、次の七人であつた。

- 委員長 斎藤兼太郎
- 副委員長 高野常吉
- 委員 山口金治 仲谷勇五郎
- 委員 藤沢勇蔵 原田吉太郎

田岸藤吉

て少し細くなった。地域によってはかなりの被害の出た所もあり、全道での漁船の流失は千数百隻と報道されている。

「寄贈御札

- 練刺網 十二把
 - 投網 ● すだれ
 - 長あば、ガラス浮玉
 - 古文書（古い襖の下張りから採取したもの二十数点）
- 中村 新一さん
常本 利男さん

- 貯炭式ストーブ 一個
 - 朝顔（男子の小便用便器）
- これに花を入れ、玄関に飾つたアメリカ人がいたそうですが、インテリアは、創意と工夫です。

- 米田 正雄さん
 - 宗和足膳、給仕盆、重箱
 - 木製漆塗椀・ほか漆器
 - 陶器類 三百点以上
- （寄贈品整理中）

田口 甫さん



他青年団員や、袖（そま）夫人など総勢三十二人であつた。

翌年、六月から七月にかけて委員三名と米田助役等は、寿都線（私鉄）、岩内線、建設中の増毛線や、遠く浜頓別線などの状況を視察した。

そして、七月の町会にその視察報告書を提出して、鉄道敷設基礎調査委員会としての任務を終えた。（つづく）

第一回の路線予定地踏査は、

大正九年十一月十六日から二日間にあつた。稲倉石鉾山から余市郡然別駅の間で行われた。

参加したのは、高野常吉、原田吉太郎、米田岩吉、中村重次郎、北浜嘉雄、梅野富蔵、その